

【論考】

文房具の本質について

—デジタル文具からみる文具論—

奈良女子大学 文学部

正下暖子

〈目次〉

1. はじめに
2. デジタル文具とは
3. デジタル文具の需要
4. デジタル文具に置き換わるもの
5. 文房具の持つ可能性
6. おわりに

1. はじめに

全ての物事においてデジタル化が進んでいる現代社会。文房具も例にたがわずその流れの中にいる。しかし文房具は本当にデジタル化する必要はあるのか。文房具とは本来アナログなものであり、そのアナログ性こそが文房具の本質であり良さではないのか。

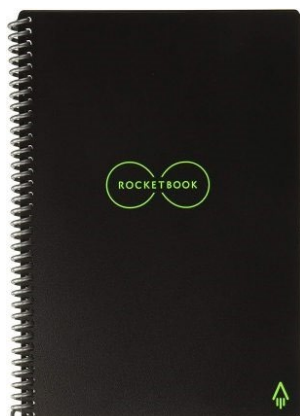
この研究では文房具のデジタル化について批判的な視点から読み解いていこうと思う。デジタル文具の需要、デジタル化以外の文房具のこれからの可能性などを過去の文房具の進化の流れから考察していければと考えている。

2. デジタル文具とは

皆さんはデジタル文具という存在を知っているだろうか。私たちのような学生にはあまり縁のない物のように私は感じているのだが、デスクワークの多い社会人には活用されているようだ。情報化が進む社会で誕生したデジタル文具について、ここで紹介したいと思う。

現代はインターネット時代であり、あらゆるものに情報の編集性が求められるようになった。それは文房具も例外ではなく、その中で誕生したのがデジタル文具である。それには

様々な種類があるが、実際に自分の手で書いたものをパソコンやタブレットなどの電子機器の中に取り込むことができるというノートやペンなどが多い。また Rocketbook というメーカーが作った「Everlast」(写真①)は書いた中身をデジタル化できるだけでなく、紙を洗えばまた真っ白の状態になり、半永久的に使うことが可能なものである。この紙を洗えるという機能はむしろデジタル的なものではなく、しかし書いたものをデータとして取り込めるからこそ消すことができるという非常にアナログ性とデジタル性がうまく共存した商品なのではと驚かされた。



写真①Everlast



写真②Bamboo Slate

- ① https://rocketbookjapan.com/item/navy_everlast

メーカートップページ <https://rocketbookjapan.com/>

- ② <https://www.wacom.com/ja-jp/products/smartpads/bamboo-slate-and-bamboo-folio>

メーカートップページ <https://www.wacom.com/ja-jp>



写真③アンキスナップ

暗記マーカーSMS1-F

- ③ <https://www.pentel.co.jp/products/digitalstationery/ankisnap/>

メーカートップページ <https://www.pentel.co.jp/>

- ④ <https://www.livescribe.com/ja/smartpen/>

メーカートップページ <https://www.livescribe.com/ja/>



写真④livescribe3smartpen

デジタル文具であるペンで囲んだところだけがデータとして取り込まれるもの(写真③)は、新聞のスクラップなどに使われている。中には、紙に書くと写真に撮ったりスキャンしたりする必要もなく電子機器に取り込めるものまであり、効率化を求めた際に非常に便利で魅力的な文具であることが分かる。ただしこれらは専用のアプリと連動していることが多く、この文房具単体で使うのは難しいものが多い。

現代社会では、構築的なものづくりから編集的なものづくりが主流となってきたという(久保博尚 1996:127)。文房具がデジタル化の方向に進化してきた背景には効率化が求められる社会の存在があるのではないだろうか。

3. デジタル文具の需要

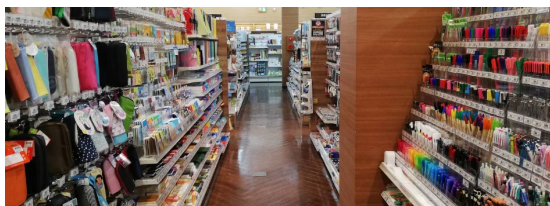
次にデジタル文具の需要について考えてみたいと思う。マイボイスコム株式会社の自主アンケート(<https://www.myvoice.co.jp/biz/surveys/17809/>)をここで見てみたいと思う。ここから分かることとして、「文房具購入時の重視点上位3位」があり、価格・機能性・使いやすさである。価格はともかくとして、他の二つはデジタル文具が条件を満たしているように思う。

次に購入場所。これは「100円ショップ」が5割強を占めた。これを見ればデジタル文具はまだそこまで文具界を席卷しているわけでもないように感じる。

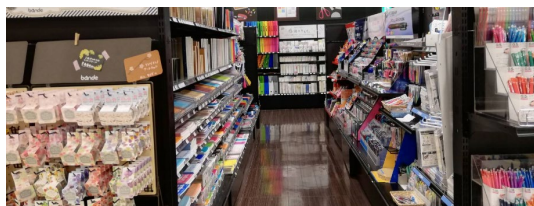
そしてメモの取り方。これは「紙にメモ・保存」が8割強。「デジタルツールにメモ・保存」が3割、「紙にメモしデジタルツールに保存」が1割強。「電子メモ帳、デジタルメモ、電子ノート、スマホノート、ラベルライター利用者」が約5~6%だった。ここから分かることは、まだ文房具業界の主流はアナログ性の強い文房具にあるということだ。ただし注意が必要なのは、このアンケートは2013年に実施されたものであり、今は少し状況が変わってきている可能性も考えなくてはいけない。

そこで私は独自に、デジタル文具がどこまで浸透しているのかを知るために、かなり大型の文具フロアを3箇所歩いてみた。いずれも広大な文具スペースを擁しており、品ぞろえという点においてはかなりレベルの高い三店舗である。

このうち2店が下記である。純粋なアナログ文具の種類豊富さは目を見張るものである。しかし、私の探し方の問題やショッピングモール内の家電系店舗との棲み分けかもしれないが、これらの2店舗にはデジタル文具は置いていないようであった。



↑A店



↑B店

ただ別の C 店にはデジタル文具が置いてあった。上記でも紹介した Bamboo Slate が販売



されていたのだ（左図上）。しかし目立つ形で販売されているデジタル文具が多くないというのは、あらゆるもののデジタル化が求められる現代の社会においては、意外なことではないだろうか。

私ははじめ、価格的な問題があるのではないかと考えた。しかし、一本 3000 円するようなシャープペンシルが A 店には売られていた（下図）。



←非常に高価シャープペンシル

上：Pentel オレンズネロ <https://www.pentel.co.jp/products/automaticpencils/orenznero/>

下：Rotring 社のシャープペンシル <https://www.rottring.com/jp/118-mechanical-pencils>

デジタル文具の中にはこれよりも安価のものも多く存在する。例えば上記で紹介した暗記スナップはわずか 388 円である。このことから、デジタル文具が文具コーナーに置けない理由を値段が高いからだと思いつけるのは良くないようだ。

現在のデジタル文具の多くはネット通販で買うものが多く、いっぽう、文房具の中心市場はやはりまだネット市場では無いことが、この売場のあり方に反映しているのかもしれない。なので、売り場の様子からだけ動静を判断するのは性急かもしれない。とはいえ、デジタル化がかならずしも歓迎されない文房具業界やユーザーのあり方は、どんなものにも効率化が求められがちなこの社会においては異色の存在である。そのことから、人々が文房具に求めるのは編集しやすいデジタル性ではなくむしろそのアナログ性なのではないだろうか。

4. デジタル文具に置き換わるもの

2 節の“デジタル文具とは”でも述べた通り、デジタル文具とは効率の良さを追い求めたものである。その進化が進んでいけば皮肉なことではあるが文房具ではなくなってしまうと私は考える。消えるペンが現れたことで修正テープや修正液の需要が下がったように、目の

前の利益を求めて文房具のデジタル化を推し進めれば、いずれ文房具と呼べるものは無くなってしまわないだろうか。

文房具とは、どのような形であれアナログ性がなければ文房具とは呼べないと私は考えている。デジタル文具であっても手書きというアナログ性は常に持っていた。ネット通販サイトなどの、デジタル文具の売り上げランキングに「Apple pencil」がランクインしていた。しかし、それは文房具とは私はどうしても考えられない。電化製品や情報機器を扱う企業が開発し電気屋で売られる。書くという作業にアナログ性は残っているのかもしれないが、書くものも書かれるものも電子機器である以上、その書かれたものが現実世界に残ることは無い。すべてその機械の中にあるデータである。停電が起きようが、機械が壊れようが書いたものが失われることなく存在する。実際に書いたものが今この世界に確かにあるということが、アナログ性ということではないのだろうか。

書く・切る・消すなどの作業からそのようなアナログ性が消え去れば、先ほども述べた通りそれはもはや電子機器であり、パソコンなどにすでに組み込まれた機能である。デジタル文具がそのデジタル性を追い求めれば追い求めるほどにそのアナログ性は失われる。電子機器にデジタル文具が利便性で勝負しても勝ち目はない。文房具の魅力とは利便性はもちろんあるが、それ以上にそのアナログ性こそが文房具の本質であり魅力である。進化していくデジタル文具に置き換わるものとは、既に存在している電子機器である。もしデジタル文具が文具業界を席卷し、文具企業が競うようにデジタル性を追い求めた商品を作らなければ、近い将来文房具は姿を消し、電子機器が文具コーナーの商品棚に並ぶことになるだろう。

5. 文房具の持つ可能性

文房具の良さはそのアナログ性であると私は考えているが、今回デジタル文具を調べてみてその利便性を改めて実感することも多かった。今のような、アナログ性とデジタル性が共存したデジタル文具であれば文房具の未来を奪うこともなく進化を続けていくだろう。デジタル性を求めずに、デザインやアナログ的機能を発達させていくものも多いだろう。本来、文房具とは他の道具に比べて趣向性の強いものである。自分で色を組み合わせることができる多色のボールペンなどが出てきている今、自分で好きな文房具をデザインできるものが出てくる未来もそう遠くはないだろう。デジタル性と共存の中で、アナログな文房具が持つ可能性はとても大きいものではないだろうか。いつか文房具売り場に、見たことがない文具が並ぶ日を私は心待ちにしている。

6. おわりに

ここまでデジタル文具を通して文房具の本質について話してきたが、今回の研究で私は

文房具の魅力のひとつだと思っていたアナログ性が、実は文房具の本質そのものであるという結論にたどり着いた。アナログ文具はデジタル文具よりも値段が安いから優れているわけではない。むしろ今回の調査で、文房具の多様化が進むにつれてプレミアム文具のような高価な文具に対する需要も知ることが出来た。

私たちが文房具に感じる魅力は、書いたものが今この場にあり、書いたという事実が簡単には失われないアナログ性。文房具とアナログを切り離して考えることは、もはや不可能なのではないのかと私は考える。

【参考論文・ウェブサイト】(下記以外は本文中に記載)

- ・久保 博尚、1996「インターネット時代のモノづくり」『生産管理』3巻、2号、p. 127-130.
下記で閲覧可

https://www.jstage.jst.go.jp/article/seisankanri1995/3/2/3_2_127/_pdf/-char/ja

- ・文具業界の動向（インターネットサイト「業界動向」内の"業界一覧"より）

<https://gyokai-search.com/3-bungu.html>

- ・「今デジタル文具が熱い！未来感溢れるおすすめの文房具を要チェック！」インターネットマガジン『エシプロマガジン』2018-04-17 付記事

<https://mens.esupro.co.jp/entry/future-stationery>

■本稿書誌情報■

『文具に関する論考と企画：奈良女子大学文具ゼミ 2020』

〔2020年度「文化社会学演習」WEB版報告書〕 <https://bungu-narajo.org/>

2020年8月1日 編集・発行 国立大学法人奈良女子大学文学部

人文社会学科文化メディア学コース 小川伸彦研究室編

〒630-8506 奈良市北魚屋西町 E-mail ogawanobuhiko@cc.nara-wu.ac.jp